

## eラーニングでのレポート作成授業の実践と成果評価

米澤 誠<sup>1)</sup>＊

1) 附属図書館工学分館管理係長

## はじめに

テキストによる講義中心の受動的な学習方式だけではなく、主体的に情報を収集し、意見をまとめていくといった能動的な学習を進めるには、図書館の活用が不可欠である。本稿では、eラーニング環境で図書館利用を中心としたレポート作成授業を実践し、その成果評価を行った試みについて報告する。

## 1. 図書館を中心とした学習の効果

コロラド大学元学長のギーと同大学元図書館長のブレイビクによると、図書館を中心にとりこんだ学習には、次のような潜在的価値があるという<sup>1)</sup>。(図1)

- ①自主的に問題解決を行う図書館中心の学習は、膨大な情報の中から自主的に情報を選択する学習能力を獲得させる
- ②図書館における調査経験は、学習プロセスの当初から最後まで、情報を探索して整理し、それに基づき能動的に行動する能力を養う
- ③生涯を通じ、不断に変化する情報から、必要な情報を見つけ出すための探索術を習得できる
- ④問題解決による発見型の学習は、教員から与えられるプレッシャーがなく、学習効果が高い
- ⑤学生の多様な能力や関心に対応して、図書館は多様な資料を提供することができる
- ⑥図書館の多様なメディア資源と学習環境は、学生の嗜好する多様な学習スタイルに適合する

これらの効果を実証するために、筆者は2006年度から非常勤講師を務めている大学の授業で、図書館を中心とした学習方式を実践することとした<sup>2)</sup>。

## 2. 図書館を中心とした授業の実践

## 2.1 eラーニング方式授業

筆者が担当している授業は、すべての授業をeラーニング方式で実施している八洲学園大学の図書館経営論である<sup>3)</sup>。図書館経営論は1単位の科目で、春期と秋期それぞれに開講している。

八洲学園大学のeラーニング・コースには、スクーリング履修科目とテキスト履修科目がある。スクー

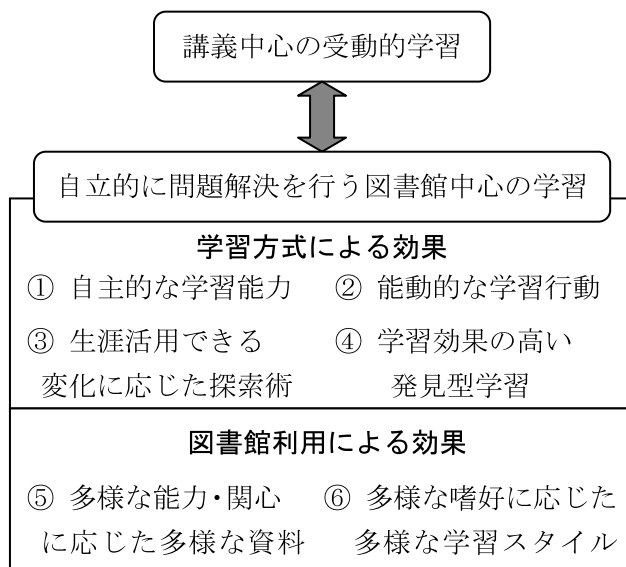


図1 図書館中心の学習の効果

\*) 連絡先：980-8579 宮城県仙台市青葉区荒巻字青葉6-6-03 東北大学附属図書館工学分館

リング履修科目は、オンデマンド動画による講義、もしくは教室での講義により学習を進める科目である。これに対しテキスト履修科目は、指定された教科書を読解しながら学習を進める科目となっている。

図書館経営論はテキスト履修科目であるため、筆者も自宅からeラーニング・システムによる指導を行うことができる。2006年春期の履修生は137名、2006年秋期の履修生は177名となっている。

2.2 レポート作成を主目的とした理由

図書館経営論は、図書館管理職クラスの職員に必要とされる知識内容からなる。図書館司書の資格をとる段階の履修生にとっては、この知識内容もそれと関連する職務経験も少ないのが実状である<sup>4)</sup>。よって、テキストの読解による知識内容の獲得を目標とするだけでは、この科目における学習効果は低いと判断した。

それに代わるものとして、実際の図書館を調査・取材した上で、テキストなどの文献に示された情報や知見をもとに、その図書館の経営について考察を加えたレポートを作成するという学習方式をとることとした。図書館経営論という科目だからこそ、取りえた学習方式かも知れない<sup>5)</sup>。

履修生は全国に居住していることから、対象とする図書館は各自が選択することとした。これにより十人

十色のレポート内容となり、全国のさまざまな種類の図書館に関するレポートを受けることとなった。

この学習方式により、履修生は「A.テキストの知識」と「B.実際の図書館に関する知識と経験」を学習できると考えた。さらにレポートの作成過程を通じて、「C.図書館の活用法」と「D.レポート作成法に関する技能」を獲得することを目標とした。この科目の学習により、図書館の活用法とレポート作成法を習得することができれば、生涯活用できる主体的学習能力を身に付けることになる考えたのである。

図書館を中心とした学習効果を達成するために、指導上留意した学習行動を図2に示す。

2.3 eラーニングにおける学習効果を高める工夫

八洲学園大学のeラーニング・システムでは、さまざまな機能が利用できる。その中から、筆者が主に利用した機能とその活用法を示す。

(1) 授業機能

- ・教材提示機能
- ・レポート課題提出・受領・添削・回答機能
- ・セルフチェックテスト機能
- ・採点・成績評価機能

教材提示機能では、テキストを補完するための資料を数多く提示するようにした。特に、図書館の活用とレポート作成を支援するための教材として、既に東北大学附属図書館で作成していた冊子『東北大学生のための情報探索の基礎知識』<sup>6)</sup>や『図書館のすすめ』<sup>7)</sup>、図書館利用者講習会で使っていた教材「上手なレポー

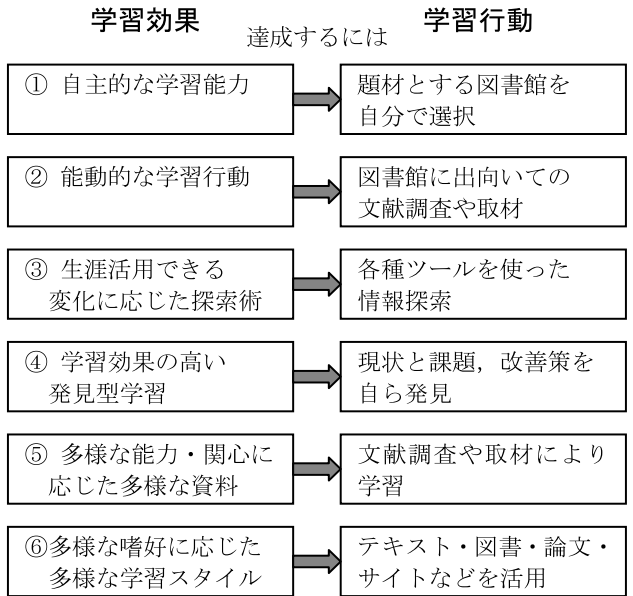


図2 学習効果を達成するための学習行動

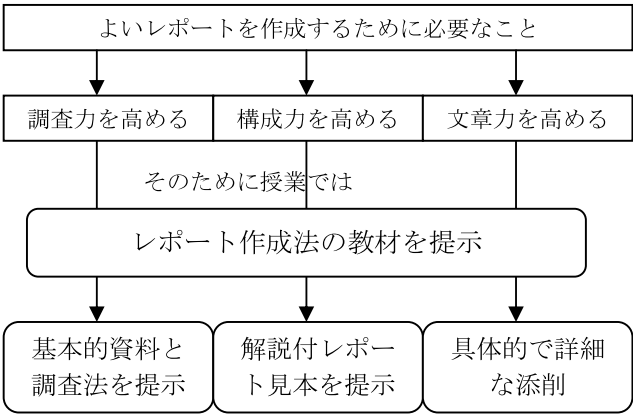


図3 レポート作成を支援する教材と指導

トの作り方」や「レポートチェックシート」<sup>8)</sup>を活用することにした。eラーニング・システムでは、冊子を公開しているウェブサイトや電子的なファイルを提示することができるため、常時履修生が参照できるというメリットがある。

また、履修生がレポート課題を円滑に行うことができるように、筆者自身が作成した「レポート見本」およびその見本の各箇所を逐条的に解説した「レポート見本・解説」を教材として提示した。この見本の内容・体裁を「真似る」ことにより、レポート作成の力がつくと考えたからである。(図3)

提出されたレポート課題については、できるだけ具体的に詳細な添削指導を行った。レポート添削は、内容・体裁・文章の3つの観点から行った。eラーニング・システムでの添削は、文章のカット&ペーストが容易で、文章を引用しての指導が容易であるという長所がある。

レポート作成を主目的としたが、テキストの読解が正確にできているかを履修の最後にチェックできるよう、クイズ感覚で行うセルフチェックテストも用意した。eラーニングのでのチェックテストは、いつでも履修生の都合に合わせて実施できるという長所がある。

## (2) コミュニケーション機能

- ・アンケート機能
- ・質問受付・回答機能
- ・メッセージ送信機能
- ・掲示板機能

コミュニケーション機能は、対面できないというeラーニングの短所を補うものとして、効果的な活用上の工夫が必要だと考えている。筆者の場合、第1レポート課題提示前に履修生の関心を高める手段として活用している。

具体的には、履修生の情報資源の利用頻度に関するアンケートを実施し、その回答の集計結果を海外の調査結果と比較して公開するなどの工夫をしている。授業評価にもアンケートを使っているが、履修初期に授業への動機を高めるのに活用することができる。

質問受付・回答では、必ず文中に相手の名前を呼び

かけとして入れるようにし、「個に応じた教授を受けている感覚」<sup>9)</sup>を大事にしている。質問を受けたときは、eラーニングにおけるカウンセラーである「メンタ (Mentor)」の役割で対応するように心がけている<sup>10)</sup>。特に「レポートの提出が間に合わない」などの質問の場合は、ドロップアウトさせることのないよう、寛大にな気持ちで応答する必要があると考えている。

一方、講師である筆者の関心や興味などについてのさまざまな話題を掲示板やブログに示し、履修生とのコミュニケーションを図るようにした。これも、履修初期の動機を高める目的で行っているものである。

## 3. 成績評価および授業評価

### 3.1 レポートの採点方法および成績評価

履修生には、①第1レポート「ホームライブラリーの現状と特色」(約3,000字程度)、②第2レポート「ホームライブラリーの現状・特色、課題と改善策」(約5,000～8,000字程度)の提出を課した。第2レポートは、添削指導に基づき第1レポートを推敲・加筆した内容で提出を求めた。段階的にレポートを完成させるという手法をとったのである。

レポートの採点および成績評価は、レポートの添削の観点と同様に、内容・体裁・文章の3つの面で評価し、総合的に7段階(A+～C)で採点した。第1レポート(30点満点)と第2レポート(70点満点)での採点結果の相関を示したのが、表1である。縦軸に示した第1レポート113名の採点段階(A+の評価がないため

表1 レポート採点の段階変化度

変化 採点	*	-2	-1	0	+1	+2	+3	+4
A		3		3	3			
A-	1		4		1			
B+			1	3		2		
B	3		1	17	14	2	5	
B-	9			4	17	7	3	4
C	2				1	2	1	
合計 (N=113)	15	3	6	27	36	13	9	4
%	13	3	5	24	32	11	8	4

\* 第2レポート未提出の者

6段階評価) 毎に、第2レポート採点の段階変化を人数で示したものである。

第1レポートでA-～Aの高評価をえた履修生(15名)は、第2レポートでの変化の度合いはさほど大きくない。採点者の実感として、レポートの内容・体裁・文章面での向上の度合いは少ないという印象であった。むしろ内容面で伸び悩んでしまう場合があった。

これに対し、第1レポートでC～B+の低中評価であった履修生(98名)は、第2レポートでの向上の度合いが大きいという結果になった。低中評価だった者のうち、16名(16%)がA-以上の高評価に変化し(表1中の網掛けの部分)、加えて42名(43%)が上位段階に向上している。合計約6割の者が得点を向上させることができたことになる。採点者としては、特にレポートの体裁・文章の面での向上の度合いが高かったと感じた。

一方、低中評価であった履修生の中からは、第2レポートが未提出となった者が多くでた。メンタとして提出できなかった理由をメッセージ送信機能で問い合わせたところ、多くは仕事が多忙で提出できなかったとのことで、学習方式や指導方法が原因であるという回答はなかった。

なお、第1、第2レポートともに、内容的に優れていたものを選定し、履修生の許諾をえた上でグッド・プラクティス(優秀レポート)として教材に公開した。他の履修生の手本になるとともに、履修生に達成感を与える手法であると考えている。

### 3.2 履修生アンケートの結果

第2レポートの提出後、授業内容に関するアンケート調査を実施し、80名からの回答をえた。設問は、①履修して身に付いた知識・技能、②有用であった資料、③さらに必要な資料、④自由意見からなるものである。

履修して身に付いた知識としては、「取材した図書館の情報」が1位(回答者の75%)で、「図書館経営論の知識」が3位(61%)、「図書館経営の話題」が4位(55%)、「改善に関する知見」が5位(54%)となっている。

一方、身に付いた技能としては、「レポート作成力」が2位(70%)、「文章作成力」が6位(49%)、「情報探索力」が7位(29%)となっている。

回答者1人当たり、約3.9項目の知識・技能が身に付いたとの結果となっている。図書館経営論に関する知識だけではなく、生涯活用できる主体的学習能力を学ばせることができたと考える。(図4)

有用であった教材としては、「レポート見本」が1位(81%)、「添削結果」が2位(73%)、「レポート作成法」が3位(66%)、「優秀レポート」が6位(31%)となっている。

図書館経営論の知識をえるための「テキスト」は4位(58%)、文部科学省の報告書『これからの図書館像』は5位(50%)となっている。

回答者1人当たり、約4.4項目の教材が有用であったとの結果となっている。知識をえるだけではなく、技能を身に付けるための教材・指導が高い評価をえて

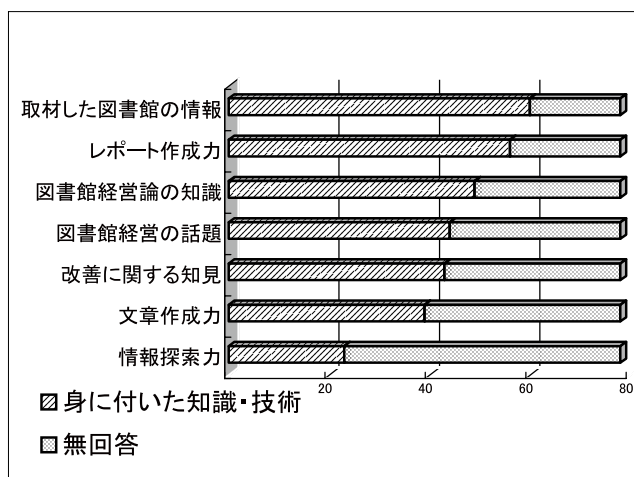


図4 履修して身に付いた知識・技術

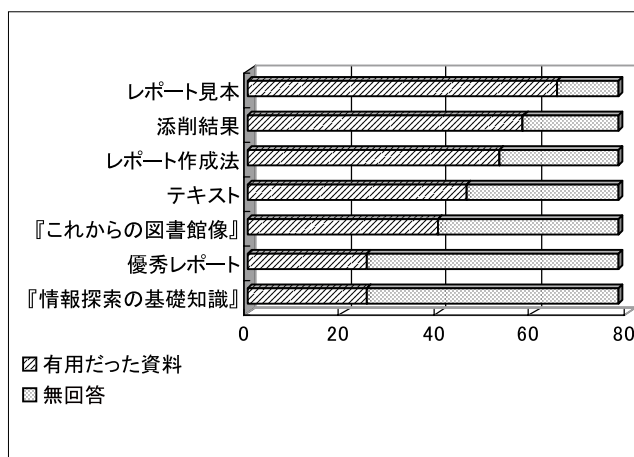


図5 有用だった資料

いることが分かる。(図5)

自由記述では、47名(回答者の約59%)からのコメントがあった。そのうち40名(50%)からは、有益だったとのポジティブな評価をえている。コメントの中からいくつか、印象的だったものを「アネクドテ・エビデンス(逸話的証言)」として示したい。この授業のねらいであった、「生涯活用できる主体的学習能力を身に付ける」ことが達成できたと考えている。

- ・インターネットを通じての学習でしたが、積極的にコミュニケーションを図ろうとされる姿勢が、とても印象的でした。
- ・教科書のマニュアル通りではない、他の科目では学べないことを学ばせていただきました。
- ・テキストで知識を学ぶだけではなく、自分の頭で考えたり、色々な資料を調べたり、図書館員にインタビューしたりと、実践を伴った科目だった。
- ・今回の履修を通して、考え方の幅が広がりました。新しい世界を知るって、本当に楽しいものです。
- ・与えられた課題をこなすのではなく、学ぶ姿勢・楽しさを教えていただいた。
- ・足を使ってレポートを完成する楽しさを知りました。
- ・難しいレポートではあったが、はじめから例を示していただき変な方向へ迷うこともなかった。とても配慮の行き届いた構成であると思う。
- ・何人かの提出された課題レポートを掲示して下さったのは、同じことを学ぶ人々がどんな風に考えているかを知ることができ、また自分と違った地域の図書館事情が分かり、とても興味深かった。
- ・レポートの枚数も多く大変でしたが、実力がついたと思います。
- ・苦しくも達成感のある科目でした。さみしい気持ちがします。

## おわりに

2003年の国際会議「Information Literacy Meeting of Experts」(チェコスロバキア開催)で採択したプラハ宣言では、情報リテラシーを次のように定義している。「情報リテラシーとは、生涯学習における基本的

権利であり、情報を同定し、見つけ出し、評価し、組織化し、効率的に創造し、利用し、コミュニケーションする能力と知識である」<sup>11)</sup>

大学生が図書館を利用する頻度やその有用性の認識度は、通常の利用者よりも高いことが示されている<sup>12)</sup>。まさに「現在の大学生は将来の社会の在り方を決める社会人となるのであるから、将来のよき図書館形成のために利用者教育は不可欠」<sup>13)</sup>なのである。

ウェブ主流時代の現在<sup>14)</sup>、生涯にわたって情報を適切に利用する社会人を育成できるのは、まず大学と大学図書館なのである。生涯学習という視点から、図書館を中心とした学習の有用性を認識し、大学における基本教育として確立する必要があると考える<sup>15)</sup>。

## 注記・文献

- 1) P.S. プレイビク・E.G. ギー. 情報を使う力: 大学と図書館の改革. 勁草書房, 1995, 258p.
- 2) わが国での先行する実践事例報告としては、次のものがある。
  - ・井上浩一. レポート作成指導授業と図書館の快適性. 情報の科学と技術. 52(1), pp.16-21, 2002.
  - ・井上浩一. 2004年度1回生セミナー: 「レポート作成法」. 大阪市立大学大学教育. 2(1), pp.25-32, 2005.
- 3) 八洲学園大学. 学校法人八洲学園大学. (インターネット) <<http://study.jp/Univ/yashima/index.asp>> (参照2006-11-29).
- 4) 2006年秋期履修生(177名)の男女、年齢別統計は次の通りとなっている。図書館管理職になる前の年代(10～30代)の履修生の割合が多い。
  - ・男性 23%, 女性 77%
  - ・10代 2%, 20代 40%, 30歳代 35%, 40代 19%, 50代以上 4%
- 5) 2006年度秋期のシラバスの抜粋を付録に示す。
- 6) 東北大学附属図書館. 東北大学生のための情報探索の基礎知識. 基本編2006. 同図書館, 2006, (インターネットでも利用可) <<http://www.library.tohoku.ac.jp/mylibrary/tutorial/>> (参照2006-11-29).
- 7) 東北地区大学図書館協議会. 図書館のすすめ: 大学図書館利用ガイド. 同協議会, 2005, (インターネットでも利用可) <<http://www.library>

- tohoku.ac.jp/tohokuchiku/susume.html > (参 照 2006-11-29).
- 8) 東北大学附属図書館工学分館で実施している「理工系学生のための講習会 (上手なレポートの作り方)」で使用している教材である.
- 9) 深谷優子. 教授・学習研究の動向. 教育心理学年報. 45, p.82-91, 2006.
- 10) 玉木欽也監修. eラーニング専門家のためのインストラクショナルデザイン. 東京電気大学出版局, 2006, 189p.
- 11) Specser Thompson, Information literacy meeting of experts, 2003, (インターネット)  
< <http://www.nclis.gov/libinter/infolitconf&meet/post-infolitconf&meet/> > (参照 2006-11-29).
- 12) Perceptions of libraries and information resources : a report to the OCLC membership, OCLC,, 2005.11, (インターネット) < <http://www.oclc.org/reports/2005perceptions.htm> > (参照 2006-11-29).
- 13) 丸本郁子ほか. 大学図書館の利用者教育. 日本図書館協会, 1989, 256p.
- 14) 米澤誠, ウェブ主流時代における情報リテラシー教育再構築の試み, 薬学図書館, 51(3), 2006, pp.193-197.
- 15) 次の書籍もこの視点に立ったものである.  
・佐藤望ほか. アカデミック・スキルズ. 慶應義塾大学出版会, 2006, 160p.

## 付録：2006年度秋期シラバス（抜粋）

### 図書館経営論

#### [科目の概要]

- ・図書館とは、資料を収集・保存するだけでなく、それらを利用者に提供して満足度の高いサービスを行うことを目的とするものです。組織としてのこの目的を達成するために、継続的・計画的に意思決定を行って実行し、事業を管理・遂行することが図書館経営なのです。
- ・図書館経営の中心となるのは、建物としての図書館と図書館資料、そして図書館職員の3要素です。図書館サービスを成り立たせるこの3要素に加えて、図書館サービスの評価とそれによるフィードバックも、図書館経営の重要な要素となります。
- ・本科目では、教科書により図書館経営上の諸問題を知るとともに、実際の図書館の経営事例を見聞することでさらに理解を深めることを目指します。将来、図書館職員として働くことを希望する学生のみならず、よりよい図書館サービスを考えたい図書館員には、ぜひ受講を薦めたいと思います。
- ・また、課題レポートの作成指導を通じて、受講者全員が汎用的なレポート作成の知識と技能を身に付けることを目指します。

#### [学習の進め方]

- ・本科目の目標は、受講生が図書館経営に関して問題意識をもち、具体的な図書館の実情に即して図書館サービスについての提案ができるような知見をもつことです。その知見は、自分独自のものである必要はなく、関連文献からの引用や実際の図書館管理職からの聴取意見であってもよいと考えています。
- ・そしてそれらを、きちんとしたレポートとしてまとめ上げることが重要です。自分の調べ考えたことを、読者に正確に伝えるレポートにまとめ上げる技術は、社会人になってからも非常に有用な技術となります。
- ・「学習の要点」で示した順で、計画的に教科書を読み進めてください。進捗に応じ、「教材」を提示しますので、理解を深め知識を広げるために参考にしてください。
- ・また、文献による理論的知識の学習だけではなく、図書館の具体的な経営を考える課題を通じて、将来現場で応用できるような知識・経験の習得を目指します。そのために、受講生各自がよく使うホームライブラリを決めておいてください。きっと楽しい授業経験ができると思います。

#### [第1レポート]

- ・自分が最もよく利用する図書館、もしくは最も身近な図書館をホームライブラリーとして、文献や現地調査により、その現状・特色と課題を明らかにしてもらいます。
- ・レポートの内容のみならず、レポートとしてとるべき体裁や文章の表現法を身に付けてもらえるような、細かい添削をしたいと思います。
- ・レポートの作成過程により、皆さんの力が高まることを期待しています。
- ・課題レポート作成については、汎用的なレポート作成の知識と技能を身に付けるために、進捗に応じた指導を行いたいと思います。
- ・そのための「教材」として、履修生のものを含めた何種類かのレポート見本を提示しますので、具体的な到達目標として参考にしてください。
- ・それらを手本として「まねる」ことで、確実にレポート作成力が高まるはずです。
- ・科目修得試験のレポートを提出する頃には、どこでも通用するレポート作成技術と情報収集能力を身に付けていることができています。

#### [テキスト]

- ・高山正也ほか、『改訂図書館経営論』（新・図書館学シリーズ2）、樹村房、2002

#### [参考文献]

- ・これからの図書館像の在り方検討協力者会議、『これからの図書館像：地域を支える情報拠点をめざして（報告）』、[文部科学省]、2006.3、(ウェブサイト) <[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/houdou/18/04/06040513.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/18/04/06040513.htm)>

#### [備考]

- ・耳学問ではなく、将来実際に職場で役に立つ知識と技術を身に付けて欲しいと思います。
- ・レポート作成のための資料探索方法や、レポートそのものの作成方法も習得できる授業を目指します。この授業を通じて皆さんが、生涯活用できる主体的学習能力を会得してもらうことを望んでいます。